

## 110. 昭和57年度 県指定文化財の紹介

### その2

#### 絵画

#### 1. 絹本着色阿弥陀来迎図 1幅 (平安時代)

蒲生郡安土町大字慈恩寺 浄厳院

本紙 縦102.7cm 横62.9cm

絹本着色。掛幅装。

左足を踏みさげた半跏の阿弥陀如来を大きく中心に描き、4体の菩薩と2体の比丘形が如来を包囲・先導し、5体の楽奏する菩薩が付き従って、画面左上から、右下の板葺の粗末な家屋に向けて、対角線的に来迎す



絹本着色阿弥陀来迎図 安土町 浄厳院

る場面を描く。上部には2区に分けられた色紙形が置かれ、また、中空には楽器が舞う。

阿弥陀如来は、二重円相の光背を負い、蓮華座上に左足を踏み下げて半跏する。両手の第1・2指を捻じて、右は施無畏印風に胸前で構え、左手は通例の来迎印と異なって、手首の反しが逆である。肉身は、墨線で下描きしたのちに着彩し、朱線で描き起こす手法で、白地に朱の隈が加えられている。螺髪はほとんど残っておらず、髪際線を朱で表している。衲衣は、赤色に塗り、団花文を描くほか、全面に四ツ目七宝繋ぎの截金文様が表される。光背の周縁部には金銀の切箔を施し、唐草風の文様が表されている。

先頭の菩薩は、蓮華座に跪坐し、金色の蓮台をささげ、宝冠に化仏を表した観音である。これに続く菩薩は勢至、文殊、普賢とみられる。阿弥陀の左脇(向かって右)の比丘形は地藏、竜樹の二菩薩であろう。画面左上には、横笛、篳篥、太鼓、拵鼓(答願鼓)、笙を奏する五菩薩を描く。これらの菩薩の着衣は、赤色系の彩色を主体としている。

阿弥陀如来の白毫から2条の光明が放たれ、家屋を射している。しかし、そこにいたと思われる往生者の姿は、画絹の欠損のために確認できない。家屋の囲りには樹木が描かれ、地面にはくさむらを表している。

(説明)阿弥陀如来と聖衆十一尊が、往生者の家屋に向かって静かに来迎するさまを描いたものである。諸尊の肉身は、たいへんふくよかに表され、色彩は明かしく、温雅な趣をかもしだしている。着衣などに施された截金文様も古様で、画面全体にはおおらかな気分が漂い、本図が平安絵画であることを物語っている。主尊が半跏形で、往生者の家屋を表す来迎図としては、平治元年(1159)の経筒銘のある、朝熊山経ヶ峯経塚遺物の線刻阿弥陀三尊来迎鏡が知られている。この鏡像は、様式的にも本図と類似するところが多いところから、およそ本図の製作年代を推測できよう。

本図は、平安時代に遡る数少ない来迎図で、全国的にみても貴重な遺例である。

#### 彫刻

#### 1. 木造阿弥陀如来坐像 1軀 (平安時代)

甲賀郡甲賀町大字隠岐 香蓮寺

像高(含宝冠) 38.7cm

頭上に宝冠を戴き、天冠台の下の地髪は、前面に螺



本造阿弥陀如来坐像 甲賀町 香蓮寺  
 像高 169.0cm  
 宝冠を戴いた阿弥陀如来坐像である。面相はふっくらとした丸みがあり、目鼻や口もとを大ぶりに表し、かすかに笑みを浮かべて穏やかな表情をつくる。耳朶は環状にせず、外側に強く張る。体軀は、なで肩で胸や腹の厚みが十分にあり、やや上体を後方に反らして坐るところは安定感がよい。通肩の衲衣をつけ、胸前をU字形に開くところも一つの特徴であるが、それらの衣文は太く、なかには鋭いものがまじっていて、一木造の構造と考えあわせると、かなり古い仏像と認められる。制作は平安時代中期、10世紀末から11世紀前半ころであろう。いずれにせよ、宝冠を戴いた阿弥陀像の現存遺例は、全国的にも極めて少ないところから、注目すべきである。

2. 木造十一面観音立像 1軀 (平安時代)  
 甲賀郡甲賀町大字隠岐 大岡寺

頭頂に仏面、天冠台上の地髪部に菩薩面等十面を1段に配す。両耳に巻毛を太くかけ、耳朶は不通とする。目は彫眼で、白毫は表さない。右手を垂下し数珠を持ち、左手は屈臂して水瓶を執る。条帛、裳(折返し2段)をつけ、両肩から垂らした天衣を膝下でW字形に交差させる。左足に重心をおき、右足をゆるめて立つ姿である。

(説明) 頭体を通して椽の一材で彫成し、髻、頭上面のすべてと、両方の肩から手首のところまでも本体と共木で表す。内削りはなく、全体に造像当初に近い姿で保存されている。

伏し目で、口もとを小さく刻んで穏やかな面相をつくり、引き締まった肉身や、着衣の表現も巧みである。ことに下半身にW字形の天衣をあしらうところは県内では珍しい。

制作は、平安時代の11世紀前半ころと思われ、小像ながら、本県に伝わる十一面観音像のなかでも屈指の優品と認められる。

3. 木造菩薩形立像 1軀 (平安時代)

伊香郡木之本町大字古橋 鷄足寺

像高 169.0cm

宝髻を結び、別材製の天冠台をつけ、地髪はまばら彫りとする。目は彫眼、両耳に太い巻毛をかけ、耳朶を環状につくる。右手は屈臂して、第1、3、4指を曲げて蓮華を執る。左手は軽く屈して、掌を上にし斜め前方内側に出し、第1、3、4指を曲げて、木製の魚の尾を入れた魚籃を持たせている。上半身は裸形で、条帛や天衣は表さない。下半身に裳(折返し1段)をつけ、右足を少し前に出して立つ姿である。

(説明) 上半身は裸形で、下半身に裳をまとして立つ等身の菩薩形像である。寺伝によると、左手に魚籃を持たせて、魚籃観音と称しているが、その根拠はない。目は鋭く、鼻や口もとを大ぶりに刻出して、なかなか森厳さの漂う表情をつくる。体部は、条帛をかけず、胸部の盛り上がり大きいところに特徴がある。このように条帛をかけていない例は、四天王寺の阿弥陀三尊像の脇侍像に見られるくらいで、数少ないものである。

上体を大きく表すのに対し、胴を強く引き締め、下半身は細く表現されている。裳の衣文は瀧波式の余風を残し、裳裾部の右方には渦文が認められる。頭体を



木造十一面観音立像 甲賀町 大岡寺



木造菩薩形立像 木之本町 鷄足寺

通して根幹部は桧の一枚から彫出し、背削りを行う構造も古い。制作は、平安時代の10世紀前半ころに遡るものと考えられる。

#### 4. 木造十所権現像 10軀

伊香郡木之本町大字古橋 鷄足寺

##### ① 日吉大宮(猿猴像) 像高 21.6cm

神猿が両足を開いて腰をすえ、左手は臂を屈して膝頭に手先をのせ、右手は膝頭に臂をあてて、幣を肩にかつぎ、荷葉座の上に坐す。尻に尾を表す。

##### ② 熊野大権現(如来形坐像) 像高 29.1cm

肉髻を高く表し、螺髪を彫出する。三道を刻み、通肩の衲衣をつけて結跏趺坐する。両手先は腹前に表すが印相は判明しない。緑色の蓮台に乗る。衣文は墨線で表す。

##### ③ 八幡大菩薩(如来形坐像) 像高 28.0cm

頭部は肉髻を盛り上げ螺髪を彫出する。通肩の衲衣をつけ、両手は腹前に表すが、指先を彫りださないで印相は定かでない。②の熊野大権現像の姿に似ている。

##### ④ 白山大権現(十一面観音坐像) 像高 30.4cm

頭上面(十一面)を戴き、天冠台を彫出し、条帛、天衣、裳をつける。左手は屈臂して花瓶をとり、右手は膝上で5指をひろげ数珠をかけ、右足を上にして結跏趺坐する。右膝から足先までは裳をかけない。

##### ⑤ 横山大明神(馬頭観音坐像) 像高 29.4cm

頭頂に髻を結び、馬頭をつけ、炎髪を表す。目は三眼で、口の両端より牙を上出し、本面の両側に脇面を造りだす。真手は胸前に手先を寄せ、第2指を立て、他の指は外縛印とする。真手上膊部の後部から六臂の脇手をあらわす。両足を開き蹲居する。

##### ⑥ 捷部大明神(聖観音坐像) 像高 30.1cm

宝髻を結び、花冠、天冠台を表し、白毫を埋め込む。条帛、天衣、裳をつけ、左手は腹前で蓮華を握り、右手は屈臂して胸前で5指を伸ばし、結跏趺坐する。

##### ⑦ 世代大明神(如来形坐像) 像高 30.3cm

頭部は肉髻を表し、螺髪を彫出する。体部に通肩の衲衣をまとい、両手は拱手して手先を衲衣の内に隠し、結跏趺坐する。

##### ⑧ 伊香具大社(地藏菩薩坐像) 像高 27.8cm

頭は円頂で、通肩の衲衣をつけて、衲衣の下にさらに下着をみせる。右手に錫杖を持ち、左手は宝珠を捧げ、右足を上にして結跏趺坐する。

##### ⑨ 金峯山(蔵王権現坐像) 像高 33.4cm

頭上に髪を結び上げ、両側に炎髪を表す。顔は忿怒の形相で左肩から条帛をかけ、裳をつけて、右足を上にして結跏趺坐する。右手に宝剣、左手に羂索を持たす。10軀のうち最大の像である。

##### ⑩ 日吉十禪師

(僧形坐像)

像高 29.8cm

頭は円頂で、両肩をおおう衲衣をつけ、手は胸前で拱手して手先を隠す。坐り方は、正坐か結跏趺坐なのか判然としない。

(説明) 十所権現あるいは十所明神と呼ばれている10軀の小さな本地仏像である。その形姿は、如来形、菩薩形、忿怒形のは

木造十所権現像 木之本町 鷄足寺か、世代大明神像のように、頭部が如来形で、体部が拱手する神像の姿に表すものがある。これなどは神像が、次第に本地仏へ発展していく過渡期の姿を示すものとして注目される。また、日吉大宮を猿の像として表しているのも珍しい。

これらの像は、桧の一枚から彫成し、目は彫眼とし、素地を呈している。それぞれ緑色の魚鱗葺き二段の蓮華座(後補)に坐し、像が台座から離れないように接着している。なかには、持物、手先、膝前などに別材を短くもや後補材を当てるものもあるが、比較的保存はよい。

なで肩で、膝前が小さく、衣文をほとんど刻まないところは、いかにも簡素そのもので、平安時代末期から鎌倉時代初期ころの神像彫刻の特徴に通じるものがある。やや作風の異なる像もあるが、10軀の本地仏が同時に一具として造像されたものと考えられる。

#### 書跡・典籍・古文書

##### 1. 己高山縁起 2巻 (室町時代)

伊香郡木之本町大字古橋 鷄足寺

甲巻 縦26.0cm 横1322.2cm (紙数31枚)

乙巻 縦26.0cm 横1160.5cm (紙数27枚)

卷子装。甲乙巻ともに黄土地切れで、押え竹は杉材を使用する。爪付き紐をつける。外題はない。見返しは、鳥の子紙に銀切箔を散らす。軸首は木製撥型。以上はすべて後補である。本紙は、斐格交ぜ漉き紙を料紙として、全面に裏打ちを施す。1紙の横の長さ(第2紙)は、甲巻43.9cm乙巻44.2cmで、ともに室町期の平均的数値を示している。1紙12行宛、1行13~14字詰め、罫は細い墨線で施す。

(説明) 「大日本国近江国伊香郡己高山縁起」甲また



は乙の内題のある2巻で、「當山草創事」から始まり「学頭坊事」までの12ヶ条にわたって己高山の歴史を略述するものである。甲巻奥書から、筆者は天台陰士穴太末資金剛佛子法眼春全で、応永十四年(1407)に書写されていることが判明する。

己高山を中心とする仏教文化圏は、往時の隆盛を示す文化財が多く残され、従来から注目されてきた地域であるが、記録史料となると、嘉吉元年(1441)の書写にかかると『興福寺官務牒疏』により断片的に知られるのみである。

本縁起は、当山の具体的な活動を知り得る唯一ともいべき史料である。なかでも、「當山再興事」の条は、十所明神とそれぞれの本地仏の尊名を掲げており、現存する木造十所権現像との関連上、興味深いものがある。応永十四年の書写のため、内容については全面的に信頼を置き難いとはいえ、貴重な史料といえよう。(なお本文は『近江伊香郡志』上巻に掲載されている。)

## 2. 大般若経 600帖

高島郡安曇川町大字北船木 若宮神社

(説明) 北船木の若宮神社本殿(室町建築)の裏側にある土蔵に保管される大般若経で、経箱6合に取められている。

本経は、もとは卷子本であったものを折本に改装している。その際、天地および巻末が切断されている。本文の書風よりみて、440帖は平安時代後期の書写経と認められる。その温雅な筆跡は、おそらく写経生の手になるものであろう。残りの160帖は鎌倉時代以降の補写経である。特筆すべきことは、全体の約6割に及ぶ巻(362帖)になんらかの奥書を有していることで、なかでも巻第330には寛治三年(1089)五月十三日の供養銘が、また、巻第46に嘉保三年(1096)の銘があることから、書写年代をおおよそ推測することができる。

本紙は、妻栞の交ぜ漉き紙を料紙とし、淡墨界を施

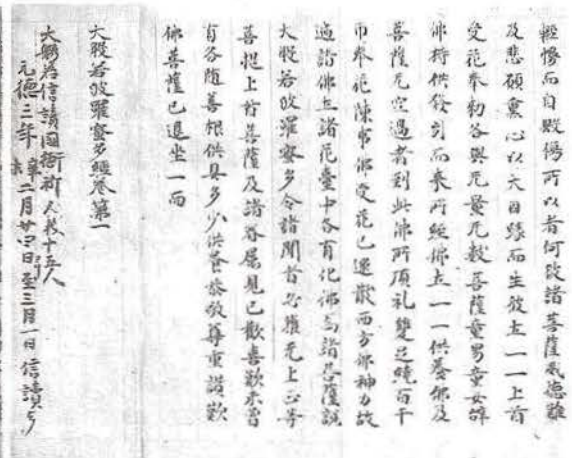
し、1行17字、1紙26行前後に書写する。これを半葉5行あてに折本にしている。首尾題は、「大般若波羅密多経巻第何」。後補の藍色の紙表紙の中央に栞紙の題簽を付し、「大般若波羅密多経巻第何」と外題を墨書している。

本経の北船木若宮神社への伝来は、奥書などからおおよそ明らかとなる。平安時代における所在は不明であるが、鎌倉時代初期には、愛知郡の百済寺東谷に蔵されていたことが知られ(建久三年=1192年、百済寺東谷僧弥榮の修理記、巻第372)、文永十一年(1274)に百済寺の堂塔八十余字が焼失したとき(巻第447)、愛知郡吉田郷の若宮神社に一時移されたようであるが、その後再び百済寺東谷の無量寿院にもどされている。次いで、南北朝時代の暦応三年(1340)には、事情は明らかではないが、伊賀国予野庄池辺社に移動している。予野は中世興福寺領、余野庄のことで、現在も三重県上野市に予野の地名が存在する。この集落に花垣神社があり、同じ境内に池辺寺があるところからおそらく花垣神社が「池辺社」であったと考えられる。その後、本経は室町時代の文亀三年(1503)に、現在の北船木若宮神社に移されたようで、地頭長綱を中心に庄官地下人等の勧進によって、折本に改められていることが知られる(巻第482)。ちなみに北船木には伊賀町というところがあり、祭礼や漁業権などについては、他の北町、中町、南町に比して特権的な地位を占めているといわれている。

一部に補写経を含むとはいえ、平安時代後期書写の大般若経が、かくまとまって伝存することは注目すべきことである。また奥書から、各地を転々としてきた伝来の経緯が明らかとなり、さらに、農村生活に密着して虫除けなどの除災祈禱のための転読がひんぱんに行なわれたことを窺わせる記述を含むなど、歴史資料としても貴重である。



己高山縁起 木之本町 鶏足寺



大般若経 安曇川町 若宮神社